

光の中を歩み、聖化を求める

ヨハネの手紙 I 1章5～10節
2022年10月9日
松田 基子 師

今日は、10月第二聖日で、ナザレン日です。今回ナザレン日について、今まで知らなかったことを教えて貰いました。それは、ナザレン日と言うのは、日本のナザレン教会独自のものだと言うことです。戦時中、キリスト教会はどの教派も日本キリスト教団に一括りにされて、ナザレン教団はその第八部に所属していました。昭和22年(1947年)に、第八部から独立して日本ナザレン教団を再建しました。翌1948年伝道部はナザレン教会の独自性を自覚する意味から、アメリカのナザレン教会が、大きなまとまりを成した1908年10月13日をも一つの起点としている事から、10月第二聖日をナザレン日とする議案を、戦後第二回年会に提出して、可決されました。そこからナザレン日が制定されました。

そこで今朝、考えたい事は、ナザレン教会の独自性です。独自性と言っても、それは決して聖書から離れる事ではありません。聖書はとても豊かで、その恵は汲めども尽きません。一つの教派、教団で、それを成し遂げることは出来ません。教会はイエス・キリストが地上に残された体です。世界中の教会がキリストの体です。体は多くの器官から成っていて、それぞれに働きが違い、特徴があります。教派、教団も聖書信仰によって一つとされていますが、体の器官には、それぞれ、働きの特徴があるように、教派、教団にも働きの特徴があります。

ナザレン教団の働きの特徴は、**聖化を重んじる教会**です。その源流は18世紀にイギリスのジョン・ウエスレーが提唱した聖化を求めて生きる生き方です。聖化とは、

『聖く化す』
と書きます。ウエスレーは、

『聖化もまた、神様の賜物であり、人間の力で獲得する事は出来ない』

と言っていますが、

『イエス・キリストの御救いを与えられた者は、神様の恵みに助けられながら、**完全を求めて歩むべきだ**』

と教えました。

ウエスレーは、

『キリスト者の完全』

を提唱しました。わたし達は完全という言葉

を聞くと、

『人間に完全はあり得ない』
と、反論するのですが、ウエスレーが提唱したキリスト者の完全は、**愛における完全**のことです。キリスト教大辞典によりますと、ウエスレーの完全の教理は、

「キリスト者が、この世に於いて愛の意図がその人の全生涯を支配するような、愛に於ける完全に到達しようと考えたのである。それは、全ての者を完全へと導き給う神の恵みに対する信仰に基礎を置いている」と説明されています。

今朝は聖化への道を歩む第一歩である、自分の**罪を知り、神様の赦しを求め、赦され、聖められる恵みを求めて**参りましょう。

わたし達は自分の罪深さを知る事は何より大事なことですが、罪を知るだけでは絶望をせざるを得ません。ヨハネはその事を知っていて、キリスト、救い主の到来から語り始めています。

ヨハネ I の手紙1章1節に、

「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます」

と言っています。

何だか謎解きのような言葉が並んでいますが、人類の救い主は、世界が造られる以前から居られました。そのお方はこの世に人の子となって生まれて来られました。それがイエス・キリストで

す。イエス様は弟子たちを選ばれました。弟子達は、イエス様と寝食を共にし、イエス様から直接その教えを聞き、イエス様の御業を、その目で見、イエス様の思い、行動の全てに付いて、手で触れるほどに知ることができました。

そこでヨハネは、1節で、

「(その方の事を伝えます) すなわち、
命の言葉について」

とっています。

ヨハネ福音書1章1節に、同じような言葉がある事にお気づきでしょう。

「初めに言があった。言は神と共にあった。
言は神であった」

と記されています。言それは神様のものであり、神様のご意志そのものです。イエス・キリストは、神様の言、御心を具体的に表すために人の子となってこの世に生まれて来られた神の御子です。

その事について2節に、

「この命は現れました。御父と共にあったが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです」

とっています。イエス様と寝食を共にした12弟子たちは、イエス様の伝道生涯ばかりでなく、十字架と復活の証人でした。イエス様による救いは、彼らに託されました。

そこでヨハネは3節で、

「わたしたちが見、また聞いたことを
(つまりイエス様から教えられたこと)
あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも
わたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです」

とっています。

弟子達は復活されたイエス様から罪を赦されたばかりか、イエス様が昇天されてからは、聖霊が降ってこられ、聖霊の働きによって、イエス様と父なる神様との交わりを経験しました。それは神様の御心が三位一体で織りなされている聖

にして愛なる交わりに、弟子達が引き入れられることでした。そして、そこに教会が引き入れられ、真の愛と喜びが広がって行く事が求められています。

そこでヨハネは、4節で、

「わたしたちがこれらのことを書くのは、
わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです」

と言って、書簡の受け取り人たちも皆、この交わりに加えられ、真の喜びが満ち溢れることを願っています。

そこで、5節から、

そのための生き方が記されています。

「わたしたちがイエスから既に聞いていて、あなた方がたに伝える知らせとは、神は光であり、神には闇が全くないということです」

とあります。

ヨハネ福音書、1章4節には、イエス様がどんな存在なのかが記されています。

「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中に輝いている。暗闇は光を理解しなかった」

とあります。

イエス様は父なる神様と同質の光として、暗闇の中に来られました。と言う事は、世界は真っ暗闇の状態にあると言う事です。光の根源であられる神様は、天地創造において、創世記の1章2節から

「地は混沌であって、やみが深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。『光あれ』 こうして、光があった」

と記されています。この様に、世界は混沌と闇に包まれていました。そこに神様は、光を与えて創造の業を成し遂げ、人間を信頼して、光の中を歩むように世界を託されました。

それなのに、人間は神様のその愛に叛き、自己中心、人間中心によって罪を犯し、罪を増し加え、その結果の死を招き寄せ、神様が造ら

れた光の世界を暗闇に変えてしまいました。そんな闇の世界に、イエス様は世界を神様の真理に回復するために、光としてこの世に来て下さいました。光の御子を送られた神様こそ、光の根源であられ、闇は全く無いお方です。ヨハネはその事を教会の人に語ってきましたが、ヨハネが他に移動した後に、異端を語る教師がやって来て、追従者達も起こりました。ヨハネはそこに非常な危険を感じてこの書簡を送っているのです。

異端教師の考えは霊肉二元論で、霊を尊び、肉体を軽視しました。その結果、罪を罪とも思わず、肉体の責任を負おうとはしませんでした。もう一つは仮現説です。イエス様が、キリスト、救い主であったのは、洗礼から十字架の直前までであって、それ以前と、十字架につけられた後は唯の人間イエス様だったと言う説を唱えました。肉体の軽視は、自分の行動に責任を持たないこととなります。それは欲望のままに行動したい者にとっては好都合です。そう言う考えが、教会の中に入ってきたのです。

そこでヨハネは1章6節で、

「わたしたちが、神との交わりを持っていると言いながら、闇の中を歩むなら、それはうそをついているのであり、真理を行ってはいません」

と罪を指摘しました。彼らは欲望のままに行動しながら、教会の集まりにも参加して、

『自分達は神様との交わりを持っている』と考えていました。彼らは自分の都合の良い様に信仰を理解して、その生き方は少しも変わっていなかったのですから、依然として闇の中にいる状態に変わりはありません。

それは偽りの生活であり、真理は行われていないと言う事は明白です。今日この様な考えからではありませんが、日曜日教会に来て、共に神様を讃え、イエス・キリストを主と告白する時、聖霊は共にいて導きをお与えになるのですが、自己中心の心の根からは、**聖霊の導き**よりも、

自己の思い通りに生きようとします。自我は**聖霊を追い出し**、自我を満足される生き方をしてしまうのです。わたし達はそういう自分に、

『人間だからもう、仕方ない』

と開き直ったり、自分自身に失望して、諦めてしまいがちです。そこに聖化が必要なのです。神様がどれ程の**愛を注いで**、わたし達一人ひとりを、**滅びから救おうとされたのか**、わたし達がその様に生ぬるく、いい加減なのは、**罪の重さ**、**滅びの厳しさ**を知らないからです。わたし達の**罪の重さはイエス様の十字架**なのです。

本来わたし達が十字架に罰せられるべきなのです。だからと言って神様は、なにもイエス様の十字架を見せつけてわたし達を脅迫しておられるわけではありません。ヨハネやパウロ、ウエスレーなど、彼らは父なる神様の愛、イエス様の愛が心に迫って来て、

『その愛に何としても応えたい。

神様を愛したい。光の中を歩みたい』

と言う、篤い思いに押し出されて聖化の生活を歩んだのです。それがどんなに幸いな生活なのか、ヨハネは1章7節で、

「神が光の中におられるように、わたしたちが光の中を歩むなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます」

と宣言しています。

光の中を歩む、それは人間の我力で出来るものではありません。実は、**神様御自身**はいつもわたし達に光を照らし、光に招いておられ、聖霊の導きを与え、**助けて下さっている**のです。それにも拘わらず、私たちはそれに**縫(すが)ろう**としないで、先走っているのです。**鎮まって聖霊を求める**ことが、如何に**大事なこと**かが分かります。その時に初めて、信徒同士、聖霊による交わり、互いに信仰と霊による共感が生まれます。しかし、なお不完全なものの集まりですから罪が全くなくなるわけではありません。でもそこに尚、大きな希望と慰めがあります。御子

イエスの血によってあらゆる罪から聖められる事が出来るからです。

イエス様は今も尚、聖め続けて下さっています。イエス・キリストの十字架の血の価で、贖う事の出来ない罪はこの世に存在しません。ただ、本人が罪を償うことは、別の問題であり、本人の責任です。責任は果たさなければなりません。神様はそれ程までしてキリスト者を聖めて、天の国まで導こうとしておられるのです。ヨハネが書簡を送った教会で、霊肉二元論を説き、霊の人だと自称していた人々は、「自分たちは物質の世界から絶縁して、霊の世界に生きているのだから、物質から汚される事はない」と主張していました。

彼らにとって、イエス・キリストによる十字架の血による贖いは必要ないものでした。しかし、そう言う風にして罪を認めないことは、自分の真の姿を認めないことであり、自分を欺いている事に他なりません。さて、聖化を求め、光の中を聖霊の導きと助けを求めて歩もうとしても、不完全なわたし達は尚、罪から免れることはできません。実は聖化を求めれば求める程、自分の罪深さに気付かされます。その問題はどうしたら良いのでしょうか。

9節に、

「自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます」

と約束されています。この事こそ、聖霊の助けと導きを求めなければなりません。何でもかんでも言い表しさえすれば、良いと言うものではありません。公に告白する事が神様の赦しの条件ではありません。心から悔い改めること、イエス・キリストの十字架の贖いを信じること、キリストに明け渡すことが求められています。この事に心血を注ぐべきです。

しかし、真の悔い改めの証人として、告白の友

を持つ事は大事なことです。相手はその告白を聞いて耐えられ、共に主の憐れみを求め、決して口外しない人でなければなりません。そのような信仰の友を得る事ができる教会である事が求められています。

ヨハネは当時、罪を犯した事が無いと言っていた人たちに対して、

『それは神を偽りものとするのであり、そのような所に神の御言葉と光は存在しない』と言っています。わたし達は、自分に罪が無いなどとは言いませんが、罪が無いかのように聖霊を退けて傲慢に生きる罪を犯しているものです。真剣に自分の罪の姿と向き合い、神様の前に心から悔い改め、イエス・キリストの十字架の贖いの血を信じ、その愛に心燃やされて、神の光を慕い、聖化をもとめる信仰を強めていただくではありませんか。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

あなた様の愛は計り知れません
御子イエス様を十字架に架けてまで、罪あるわたし達を救ってくださったばかりか、聖霊を助け主として送り、聖化への道に招き、御国まで導いてくださる恵みに心から感謝します。唯々神様のご愛に心に向け、一途に天を見上げ、聖化の道を歩む者とならせて下さい。

救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。